

# COVID-19 パンデミック下における施設実習代替演習の 内容分析と今後の課題

竹之下 典 祥 (盛岡大学)

中 島 美那子 (茨城キリスト教大学)

清 水 里 美 (平安女学院短期大学部)

嶋 野 珠 生 (富山短期大学)

covid19 パンデミックにより、保育実習に臨めない多数の学生が出るのが現実のものとなった。なかでも、児童等の代替養育場所である施設実習は、より実習受け入れ困難な実態に直面した結果、代替授業等に取り組みられるようになった。

そこで、本研究では2つの取組を行った。研究1は、保育士養成校に質問紙調査を行い、どのような対応を迫られたか実態を把握し、特に代替授業の中からグッドプラクティスを収集し、今後の教学に活用していく可能性を探った。研究2は、代替授業で例のない遠隔テレビ会議システムを用いて、大学間の学生交流を試みた。結果は、異なる地域の未知の学生との交流を緊張とともに楽しいと感じ、自己認識を新たにする機会となった。

キーワード：施設実習、代替演習、学生交流、COVID-19 パンデミック

## 序論

本研究をすすめる契機は、保育士養成において必須といえる「保育実習」がCOVID-19 パンデミックにより、指定保育士養成施設（以下、「保育士養成校」とする）の学生が実習に取り組めない状況となったことにある。とりわけ、児童福祉施設における実習（以下、「施設実習」とする）の対象である児童発達支援センターや乳児院などが受け入れ困難となり、代替演習授業（以下、「代替演習」という）や学内実習プログラムを提供する必要に迫られたためである。

## 1. 研究の目的

### 1. COVID-19 パンデミック下での国の方針と保育士養成校の動き

COVID-19の事態に、国(厚生労働省)からは、令和2年3月2日付けの厚生労働省子ども家庭局保育課による「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」の「1. 養成施設の運営に係る取扱い」の中で「(1)養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の対応等により、実習中止、休講等の影響を受けた学生と影響を受けていない学生の間、修学の差が生じることがないように配慮するとともに学生に対して十分な説明を行うこと」と示された。また、「(3)養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」と保育実習を実施できない場合の代替の演習や学内実習等の指針が示された<sup>1)</sup>。

つまり、保育士を目指す学生（以下、「保育学生」という）の利益を保護することを国（所管官庁担当課）が明示したパンデミック対応の公文書といえる。

一方、保育士養成校の教職員の立場としては保育学生の権利保障の視点から、養成年限や実習時期の違いなどで不利益が生じないように、保育実習の実地実習に代わる演習や実習を担保することが求められたわけである。

### 2. 保育実習の歴史

保育士に求められる養成内容を明らかにするため、保育士養成の前駆段階といえる保姆養成時代からの保育実習の歴史的経緯を取り上げる。

保姆はまず、施設で従事して実務的に養成されてきた。施設内に設置された養成施設としては、日本で最初の知的障害児施設滝乃川学園に石井亮一・筆子が保姆養成部を1901年に設置したこと<sup>2)・3)</sup>が、指定保育士養成施設とする

現在の保育士養成に連綿と受け継がれている。

第二次世界大戦後の保育養成課程における保育実習は、施設内に保育養成施設が設置されていた事由もあったことから、保育所実習よりも施設実習が主体で宿泊が前提であった。保育実習Ⅰは保育所を除く児童福祉施設(入所施設)で、保育実習Ⅱが保育所、保育実習Ⅲも児童福祉施設(入所か通所施設)となっており、保育実習の4分の3が施設実習で占めていた<sup>4)</sup>。このように、歴史的にみて施設実習は保育士養成にとって重要な科目であると考えられてきたことがわかる。

### 3. 保育士の専門性

竹之下(2012)<sup>5)</sup>は、社会福祉領域の対人援助職の専門性についていくつかの先行研究をまとめ、専門職の属性として、体系的な知識・理論、専門的技術、専門的権威、専門職文化、倫理綱領などをあげている。同様にこれらは保育者という対人援助職にも落とし込むことができる。これらをまとめると、保育士養成校で保育学生がとくに修得すべきは以下の4要件、①専門知識、②専門技術、③専門的経験、④職業倫理であり、これらが相互に補い合って形成されることが保育士養成において求められる。

そこでCOVID-19 パンデミックでの施設実習の代替演習や学内実習を設定する前提として、上記の専門性を施設実習に落とし込んで考慮する必要がある。上記「③専門的経験」を核として、具体的には個別支援や特別支援、さらに個別支援計画の策定といった「②専門技術」が連関して形成されることが想定される。さらに、守秘義務等との関連も含め「④職業倫理」が必須と考えられる。「①専門知識」に関しては、養護児童に対する心的外傷体験によるストレス障害、障がいの特性に関する知識、特別支援(養護方法、言語・非言語コミュニケーションの方法、心身機能、栄養・服薬等)に関する知識等が求められる。

ただし、①については従来の養成教科目のなかで得られる知識と考えられることから、主に②、③、④を学ぶことを可能とする代替演習や学内実習の構築と実施が保育士養成校に求められる。

### 4. 保育士養成校による実際の試み

早くも2020年度に実施された代替演習や学内実習の取り組みが報告されている。例えば、名古屋短期大学保育科実習委員会(2021)<sup>6)</sup>は施設実習において、感染拡大が落ち着いた時点で数日間の現場体験を済ませ、残りの部分を代替演習としている。また藤原・宮下(2020)<sup>7)</sup>の実践では、4年制大学生と短期大学生がともに代替演習によって施設職員による講話、支援技術に関する演習、体験活動の3分野から非常に幅広く学んだことを報告した。そして松居(2020)<sup>8)</sup>は、学内実習を行うに際して福祉分野の他学科の協力を得たことにより、履修生が他職種協働への理解を深めたという。このように、先行研究からは施設実習の代替としてバラエティに富む取り組みをしていることが窺える。しかし地域をまたいで調査し、かつ広範囲の地域にある養成校の代替演習内容を分析した研究は、筆者らが知る限りにおいてはみられない。

そこで本研究は、2020年1月に最初のCOVID-19 ウイルス感染陽性者の確認以降、未だ終息が見込めない現在、保育士養成校はどのような対応を迫られたか全国の実態を把握し、具体的な対応事例のなかからすぐれた実践を収集し、今後の教学に活用していくことを目的とした。併せて、本来実習経験から得られるはずの初対面の人々(施設職員や利用者、子ども)との能動的な交流やディスカッションは、学内で行う代替演習の中で経験することは非常に困難であると考えられるため、新たな試みとしてウェブ会議システムを用いた初対面の者同士(学生間)の交流、ディスカッションを試みた。そしてその実践結果から、今後の新たな代替演習としての可能性を探ることとした。

## II. 研究1

研究1では、保育士養成校がCOVID-19 パンデミック下でどのように施設実習へ対応してきたのか、また本来の実習に代わって代替演習や学内実習を実施した場合、どのような内容でそれらを行ったのかについてウェブ調査を行った。以下に研究1について示す。

1. 調査方法

(1) 調査方法および調査対象者

グーグルフォームで質問項目を作成した。項目の内容は図1の通りである。配信は、保育士養成に携わっている大学・短期大学・専門学校関係者に対し依頼の電子メールを送り、その本文にフォームのURLを貼り付ける形で協力を依頼した。

調査は2021年5月から7月にかけて行った。

(2) 倫理的配慮

電子メールにて質問への回答を依頼したが、その際、回答は無記名であり、個人が特定しないことを記した(了承した者のみ、連絡先を記入する)。回答収集の際には、筆者らが回答者のメールアドレスを確認できない設定を施して調査を行った。

- ・所属する養成校のある地域
- ・回答者の学内での立場・役割
- ・保育士養成定員
- ・保育実習Ⅰ(施設)の実習指導にかかわる教員数
- ・通常の保育実習Ⅰ(施設)の実習日数(または時間数)
- ・通常の保育実習Ⅰ(施設)の実習内容の変更の有無と、変更した割合
- ・演習授業を実施した場合の具体的内容と工夫
- ・演習授業実施の際の学生の反応
- ・演習授業実施の際の気づき
- ・実習が困難だった施設種別の有無とその理由
- ・その他意見や質問 など

2. 結果と考察

図1 保育実習Ⅰ(施設)のウェブ調査質問項目

(1) 回答分析結果

① 回答者数と所属する保育士養成校のある地域

全国から52名の回答を得た。地域別の内訳は、北海道1名(1.9%)、東北地方8名(15.4%)、首都圏12名(23.1%)、首都圏以外の関東地方6名(11.5%)、北陸地方5名(9.6%)、東海地方2名(3.8%)、近畿地方15名(28.8%)、中国・四国地方1名(1.9%)、九州・沖縄地方2名(3.8%)であった。

② 回答者の立場

施設実習の主担当38名、施設実習の副担当5名、学科長3名、学科教員1名、教務担当1名、施設実習の補助教員1名、実習事務担当1名、保育実習Ⅰ(保育所)主担当1名、保育所実習担当1名であった。

③ 保育士養成定員数と関わっている教員数

回答結果は図2のとおりである。本調査への回答者では、100名未満の養成校では2名体制が、100名以上の養成校では4名体制がもっとも多かった。

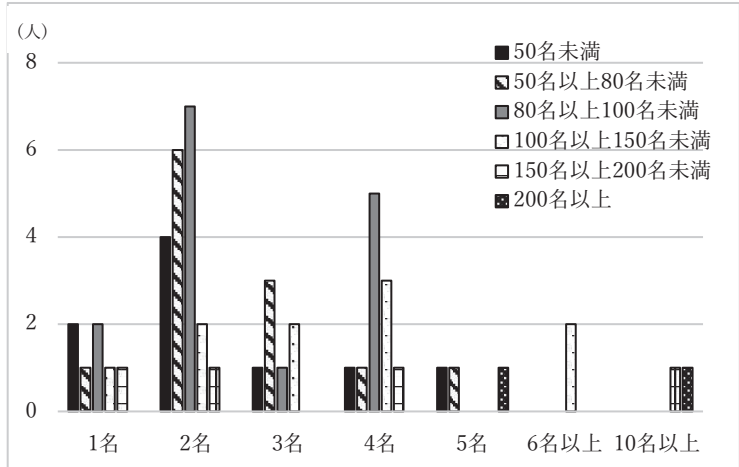


図2 保育士養成定員数と保育実習指導教員数との関連 (n=52)

④ 通常の施設実習時間数

厚生労働省の規定どおり80時間以上であるとする者が37校(71.2%)、88時間以上が2校(3.8%)、90時間以上が13校(25.0%)であった。

⑤ 今回の状況下における施設実習の内容変更の有無とその割合

一部の学生に対して施設実習内容を変更したのは23校(44.2%)、変更なしは14校(26.9%)、当該学生全員に対して変更したのは13校(25.0%)であった。また、その他の記述で、「実習先の変更」「期間および実習先の変更」が各1校ずつあった。

⑥ 具体的な変更内容についての記載

⑤で「当該学生全員に対して変更した」および「一部の学生に対して施設実習内容を変更した」と回答した者に、さらにその具体的な内容を尋ねた。「全日学内での施設実習に代わる演習に置き換えた」のが9校、「事前指導の内容を一部変更した」のが21校、「実習時期の変更」が3校、「実習先の変更」が3校、「学内と学外の福祉イベントへの

協力を組み合わせた」のが1校であった。

これまでの施設実習に関する全国横断的調査に、全国保育士養成協議会保育士養成研究所が行った調査がある<sup>9)</sup>。この調査結果によると、2020年度中にこれまでと変わらず予定通り保育実習Ⅰ(施設)を実施した保育士養成校は2割弱であり、8割以上が延期や中止を余儀なくされた。また、保育実習Ⅰ(施設)を代替演習に切り替えたのは5割弱であった。筆者らが行った上記の調査結果と比較して代替演習を行った保育士養成校数は多いが、その代替演習で実施した内容はほとんど同様のものであった。以下に、具体的な演習内容に関する筆者らの行った調査結果について示す。

## (2) 具体的な代替演習内容の分析結果

次に、学外での施設実習に代わる学内演習を行った大学の代替演習および学内実習の内容がどのようなものであったのか分析した結果を報告する。

### ①「代替演習および学内実習の具体的内容」に対する自由記述回答分析

演習授業の具体的内容に関する記述を分類し、それぞれにカテゴリー名を付した。これらの作業は、妥当性を高めるために筆者1名が行ったのち、もう1名が同じ作業を独立して行い、判断が別れる分類やカテゴリー名については、筆者全員で一致するまで議論した。以下にその結果を示す。

回答は52名中27名(51.9%)から寄せられた。それぞれの回答を分類した結果、カテゴリー数は9となった(表1)。また、「回答者の行った工夫や課題」については表2の通りである。

最も多くの大学で取り入れられていたのが、施設職員等の現職者を特別講師として招き授業を実施する「施設関係者による講話」である。現場の様子を直接現職者から伝えてもらうことで学生がより現実味をもって理解を深め、その後学生同士で話し合う演習を組み合わせて、さらに定着を図るよう組み立てていることが多かった。

次に多く取り入れられていたのが「事例検討」である。事例教材は学生の体験、既存テキストやドキュメンタリー動画など使用したり、施設の協力を得て作成した動画を視聴したりした後にいうという回答があった。

3番目に多かったのが「施設の動画視聴」である。各施設種別に保育士養成協議会が公開している動画や、施設関係者に協力を依頼し共同して作成したオリジナル映像を活用しているところも3校あった。

その他「当事者との交流」、「施設見学」、「養成校附属施設での実習」、「観察実習」、「模擬実習」など、いずれも実際の子どもや利用者とのコミュニケーションは図れないが、「工夫した点」にも指摘されている通り、「現地での実習になるべく近い疑似体験」ができるよう各校が力点を置いていることが窺えた。しかし一方で、「オンライン授業の限界を感じている」とする回答や、「オンライン授業に学生も教員も疲弊せず、より実りある演習となる工夫が必要」との指摘もあった。

### ②実際に使用した教材資料の分析結果

演習授業で使用した資料などの提供を求めたところ、5校の協力が得られた。そこで、それらの内容の一部について以下のアからウで紹介する。

#### ア 全国保育士養成協議会東北ブロック(以下、東北ブロックとする)提供の代替演習教材の使用<sup>注1)</sup>

東北ブロックでは、保育士養成校間での学びの格差が生じるのを避けられる代替演習の教材を作成し、その利用方法の適正化にも配慮している(全国保育士養成協議会東北ブロック, 2021)<sup>10)11)</sup>。

本教材の「施設実習版」作成にあたり、研究チームは「保育実習の体験的学習を補うことができる教材」の検討に際し、とくに「体験的」の意味を検討している。その結果、「体験的」の意味を「①子ども(利用者)や保育者(職員)とのコミュニケーション②子ども(利用者)や保育者(職員)の支援と支援に対する価値観との出会い③現場環境を視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感で感じる」と捉えた。この中で「現場に行かずに代替教材で疑似的に体験できる場面」は、動画教材の活用により、②および③に該当する。この観点から各施設種別の施設紹介動画、施設職員インタビュー動画、施設出身者インタビュー動画を全17本作製している。

表1 施設実習代替演習のプログラム内容

カテゴリー名	内容	件数
施設関係者による講話	直接来校してもらって、児童福祉施設職員（施設長、職員等）による講話を実施	10
	施設職員となった卒業生を招き、講話を実施	2
	ウェブ会議システムを介した児童福祉施設職員の講話	2
	里親を招き、体験談などの講話を実施	1
	計	15
事例検討	事例検討	9
	計	9
施設の動画視聴	各児童福祉施設がこのために作成した動画教材を視聴	3
	市販のDVDを視聴	2
	動画の視聴（動画の種類は不明）	2
	東北ブロック作成の動画教材を視聴	1
	計	8
文書の作成	日誌の記録	1
	個別の支援計画の作成	1
	余暇活動の指導案の作成	1
	計	3
施設見学	一部の児童福祉施設・障害者就労継続支援事業所などの見学とボランティア	1
	実習予定だった施設での半日の見学	1
	計	2
養成校付属施設での体験	付属保育所で体験実習	1
	学内の子育て支援活動の活用	1
	計	2
観察実習	実習期間外での学外演習（観察実習）	1
	施設で子どもと職員とのやり取りを観察・記録	1
	計	2
模擬実習	学内にて模擬実習	1
	模擬活動の実践	1
	計	2
その他	障害のある方との関わり	1
	施設職員が行う間接援助（掃除や洗濯等）を行う意味を考えさせる演習	1
	現地実習実施学生の記録類の参照	1
	児童虐待対応（発見・通告・支援）の流れの演習	1
	介護等体験の代替学修として文部科学省が認めた通信教育教材の学修とその報告・討議	1
	ロールプレイ	1
	調べ学習・発表	1
	壁面制作、遊びの自作	1
	計	8

表2 代替演習実施時の工夫と課題

工夫した点	件数
現地で実習した学生になるべく近い経験（疑似体験）ができるように内容を考えた。	2
Zoomによる講義と演習。	2
感染拡大が落ち着いた後にボランティアや見学で行ってみたいと思えるような内容になるように工夫。	1
事前課題および事後課題は施設職員と相談の上設定した。	1
最終日は、全体の振り返りに施設職員の協力をいただいた。	1
課題および演習の内容は養護系および障害系を半分ずつ実施した。	1
さまざまな体験の幅を「広げる」のが難しい分、「深める」ことを主眼に置いた。	1
他大学の「10日間で80時間」の演習実施が過酷だったという情報から、日数を増やして80時間を満たすようにした。	1
学生には、1日の演習時間を8時間として、朝9時までに1日のスケジュールをフォームに入力してもらい、18時に日誌をフォームでデータ提出をしてもらった。日中は事前学習、演習、事後学習の流れで、実施した。	1
課題点	
基本的に代替演習もリモート講義だったので、取り組み内容に限界があった。	1

代替演習で「疑似体験」としてできることの限界は、①利用者や職員とのコミュニケーションと③の嗅覚、味覚、触覚も含めた五感、あらゆる感覚を動員した体験は難しいということであろう。これらの傾向は、前述の「代替演習および学内実習の具体的内容」に対する自由記述回答分析結果の表1からも見て取れるように、それぞれの保育士養成校も代替演習の疑似体験を考慮して、②および③に含まれる視覚・聴覚を通した疑似体験を意識したプログラムとなるよう工夫をしていることがわかる。

#### イ 全日代替演習に置き換えた事例

全日学内での演習授業に置き換えたのは9校であった。そのうちの1校は、全日代替演習として20回の授業スケジュールを立てて実施している。最初の5回で児童福祉施設での実習の心得、保育士の役割などの講義を行った後、6回目以降に乳児院、ファミリーホーム、児童養護施設および障害児施設から学外講師を招き、事例検討とも組み合わせながら8回の授業を行っている。本プログラムも東北ブロックの定義する「②子ども(利用者)や保育者(職員)の支援に対する価値観との出会い」と「③現場環境の雰囲気や視覚・聴覚で感じること」に主眼をおいている。特徴的なのは、障害児施設での関わりを学ぶうえで、TEACCHや感覚統合理論を教授している点である。

また、当該養成校は上述の通り20回の授業で構成されていたが、他の養成校は30回授業とするなど、構成時間数に差が見られた。この代替授業の時間数については統一された見解はまだなく、先行研究の中には養成校の所在地自治体の意向が強く反映されたところもあった(内本, 2020)<sup>12)</sup>。

#### ウ 施設実習の一部分を代替演習に置き換えた事例

別の調査対象者の勤務する保育士養成校では、5日間の学外実習を挟んで前半10回、後半7回の授業を実施している。最初の3回で実習目的、保育者の役割、施設の社会的役割などの概要を講義している。実習前に感染症対策に関する授業を1回設けているが、これに関しては、他の養成校でも施設特性に合わせた手洗い動画の作成を課題に出すなど、現在の状況下での実習の特徴と言えるだろう。

実習前に施設職員の講話、子ども食堂や放課後等デイサービス等の地域資源の協力を得て体験演習を行ったうえで、遊びの計画を設計している。実習後には、施設職員に再び講話に来てもらい、日誌や計画を振り返ったうえで自立支援計画の作成につなげている。限られた体験を補う形でやはり施設職員の講話や模擬保育、地域施設での実習など、それぞれの地域資源を組み合わせた工夫が見られる。

### Ⅲ. 研究2

「研究の目的」において、保育士の専門性を構成する要素として知識・技術・経験・倫理の4つを挙げた。本調査から、実際の施設実習が満足に行えない状況下でも、代替演習によって知識・技術・倫理の学びは養成校の努力と工夫で提供できる可能性が示された。しかし、「経験」に関してはどうだろうか。そもそも現場での実践なしに経験の代替は可能のだろうか。

研究1で示した東北ブロックの指摘にもあるように、子ども(利用者)や職員らとの交流、五感をフル活用した経験は代替演習では困難である。知己の友人や養成校教員のいない場で一実習生として孤軍奮闘することも、現場で得られる貴重な経験となるが、本研究1の調査結果からは、このような経験を含む代替演習プログラムは得られなかった。また、学生同士のディスカッションや発表の機会は多く企画されていたが、それは普段から共に授業を受ける知人同士のものであった。そこで研究2として、このような課題に鑑みて保育学生が初対面の人たちの中でいかに関係を作り、相手を尊重しつつ自らの意見を述べることができるか、チームビルディングを目的とした授業実践を試み、その成果を検討することとした。

#### 1. 調査方法

##### (1) 調査方法および調査対象者

ウェブ会議システム Zoom を通して調査対象者が一堂に会し、発表やディスカッションを行った。流れや内容は筆者らがあらかじめ用意し、それに沿って参加するよう依頼した。実施の前後に現在の気持ちを尋ね、実施後のみ感想の記入を依頼した。回答収集はグーグルフォームで行った。

調査対象者の属性は、東方地方の4年制大学、関東地方の4年制大学、北陸地方の短期大学、近畿地方の短期大学（いずれも保育士養成校）に在籍する学生23名（女子学生22名、男子学生1名）で、最終年次生とした。実施は1回であり、2021年7月28日、16時30分から18時までのおよそ90分間で行った。

(2) 倫理的配慮

あらかじめ対象者に研究の目的や方法を説明し、個人が特定されないこと、参加は任意であることを説明し、同意を得られた者の参加とした。

2. 結果と考察

(1) 大学間交流プログラムの流れ

1回90分のみの実施としたため、今回は学生に内容を決めてもらうことはせず、あらかじめ交流の流れを決めて学生に提示することとした。川俣ほか(2021)<sup>13)</sup>では、同様に施設実習の代替演習にウェブ会議システムを利用して、大学内の学生同士を小グループに分けてディスカッションを試みたところ、話し合いが活発化しないという課題が示されている。そこで本プログラムでは、まず話し合いが活性化するようにアイスブレイクを取り入れ、次に自分たちの地域の紹介を写真などを介して行い、リラックスしたのちに本題のグループワークを行うこととした(図3)。グループワークの際には、当日に1番誕生日が近い人を司会者、2番目に近い人を発表者ということ指定した。

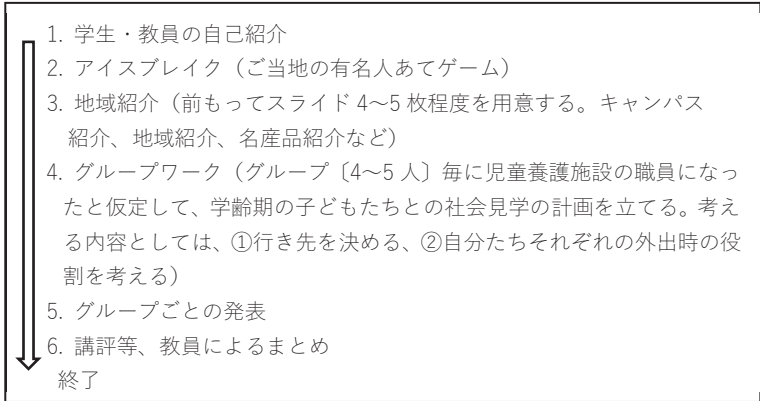


図3 大学間交流プログラムの流れ

(2) 実施後の結果

対象学生に対し、開始直後に楽しみと不安の程度を、終了間際に参加しての振り返りとして楽しさと不安の程度について5件法で尋ねた。その結果を図4から図7に示す。

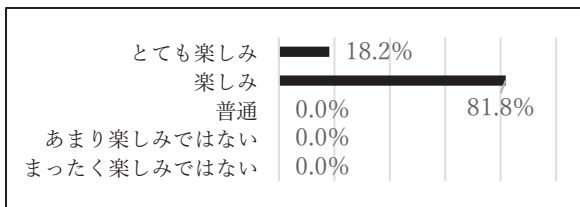


図4 楽しみの程度について〔実施前〕(n=22)

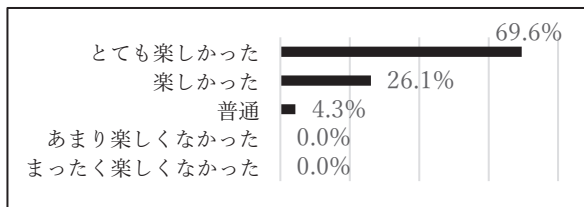


図5 楽しさの程度について〔実施後〕(n=23)

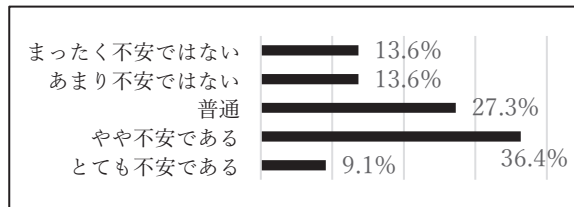


図6 不安の程度について〔実施前〕(n=22)

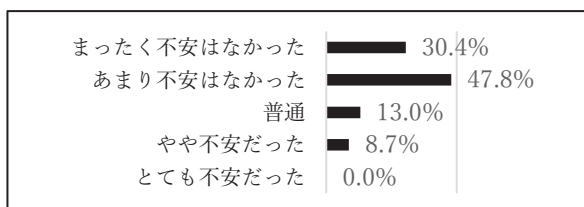


図7 不安の程度について〔実施後〕(n=23)

まず開始前（以下、事前とする）と終了時（以下、事後とする）の変化であるが、図4と図5からわかるように、事前に「楽しみ」とする者が81.1%と最も多く、「とても楽しみ」は18.2%であったのに対し、事後は「とても楽しかった」とする者が69.4%と最も多くなった。一方で、事前にはなかった「普通」を選択した者が1名いた。また「不安」に関しては、事前に「やや不安である」と「とても不安である」を合わせて45.5%の者が不安を示していたが、

事後は 8.7% に減少していた。(図 6、図 7)。

また実施後の感想を自由記述で求めたところ、23 名全員からの回答があった。頻出語をまとめた結果を表 3 に示す。前述の結果にも示されているように、初対面の人々とのグループワークに緊張感や不安感があるなかで参加したが、実際に経験してみたところ、むしろ楽しさが残ったことが終了後の自由記述からもわかる。また自由記述の中には、以下のような気づきも見られた。

- ・(他者が) 自分の過去の経験なども含めて説明してくれたことで理解がしやすくスムーズに話し合うことが出来ました。
- ・自分が時間配分を考えたり、質問を分かりやすく答えやすいものにしたらずれば、もっとスムーズに話し合いを進めることができたのに、と感じた。
- ・自分の地域の特色にも触れたことから、〇〇県(自分の暮らす県)だからできることが自分の中で見えてきた。
- ・グループの中に発言をしない人がいたので気になっていたが、自分は司会ではなかったため声をかけて良いのか悩んだ。もし次があったら、さりげなく声をかけてみたいと思った。
- ・時間内でまとめることは難しかったり、上手く進まなかったりもしたが、協力しながらできた。
- ・自分から積極的に発表できなかったが、同じグループの人たちがとてもスムーズに進めてくれたのでとても助かった。
- ・他の県の子が率先して話してくれたりして、話しやすい雰囲気を作ってくれた。

今回は 1 回のみの実施であったことから、「楽しかった」という快の経験で終了した者もいた一方で、上記の記述から、「よく知らない相手とでも、チームで協力することの大切さ」や「よく知らない人たちと円滑に話し合いを進めていく技術の必要性」「環境の異なる人とのやりとりから自分の地域環境を見直す」という気づきを得た者がいたことがわかった。

表 3 感想に表れた頻出語(実施後)

頻出語	回数
楽しかった	21
緊張した	8
(他県の他大学の学生との交流が)初めてのこと	5
初対面の人	4
他の県	3

#### IV. 総合考察

##### 1. 保育士養成における保育実習の現代的意味付け

一般社団法人全国保育士養成協議会は令和 2 年 6 月 20 日に「一般社団法人全国保育士養成協議会保育士養成倫理綱領」(以下「保育士養成倫理綱領」とする)を策定した<sup>14)</sup>。

その前文冒頭で「指定保育士養成施設の全ての教職員等は、児童の最善の利益を保障できる保育士を養成するために最大限の努力をする」とし、「なお、この倫理綱領は、指定保育士養成施設の全ての教職員が遵守することを期待されるものである」と締め括る。さらに、「I 学生に対する倫理的責任」には「I-2 教職員等は、学生に対して『定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』の中の『教科目の教授内容』及び『保育実習実施基準』を踏まえて授業及び実習を行う」と示している。このことから、COVID-19 パンデミック下において全国の施設実習が延期・中止となる事態に対し、代替演習や学内実習をいかに構築するかの議論とその確立が急務となっている。

本研究 1 の調査結果より、全国の保育士養成校は実際の施設実習で学生が得られる成果に少しでも近づけようと、さまざまな努力、工夫によって代替演習を提供してきたことが明らかとなった。施設関係者の講話、動画の視聴、事例検討、指導計画の作成等の取り組みが全国で行われていた。施設実習については、大村・高玉(2019)<sup>15)</sup>が子どもや利用者との関わりやチームで対応する職員の姿から得られる貴重な学びの重要性について指摘している。さらに臼井ほか(2016)<sup>16)</sup>は、保育学生の「実習自己評価」が「保育者効力感」に大きな影響を与えていることを明らかにしている。研究 1 の結果から、上記のような学びを代替演習で学生に保障することは困難であると考えられよう。

研究 1 より代替演習の実践において限界があったことの一つに、初対面の施設職員や子ども(利用者)との交流の機会の提供があった。初対面の相手とコミュニケーションを図り、関係を形成していくことは施設実習で得られる貴重な体験の一つであるが、同じクラスの学生同士で行う代替演習では限界がある。そこで研究 2 では、初対面の学生



間の交流を企画し、施設実習の代替演習としての可能性を探ったのである。

## 2. 未来志向の保育士養成

もう一つ、現代の保育士養成において認識しておかなければならないことがある。21 世紀の情報化社会（第 4 次産業革命）にある、Internet of Things (IoT) の社会実装が本格化しつつあり、教育・保育への ICT 導入も検討から実践へと進み始めている。この過渡的な時期に起きたパンデミックは、保育実習教育に対する ICT の活用を必然のものにしたとも言える。

教育・保育への ICT 導入が進む社会の中で、今後 COVID-19 パンデミックのなかった平穏時に保育実習の姿を戻すというよりも、パンデミック状況を前提とした実習のあり方について抜本的に検討する必要性が現実味を帯びている。そのように想定した時、研究 2 で示したように、地域の保育士養成校間の連携による、さらには地域を飛び越えた保育士養成校間の連携によるオンライン学生交流を行うことで、保育学生たちの学修効果が高まるのではないだろうか。今後これらの実践を重ねて交流プログラムを構築し、ゆくゆくは施設職員、施設に暮らす子どもや利用者の方々をオンライン上に招いて交流に参加してもらうプログラムが確立することで、さらに「経験」の質が上がるのが期待される。

## 3. 残された課題

今回の調査より、全国でさまざまな代替演習が実施されていたことが明らかとなった。しかし、総合考察の冒頭で述べたように、「保育士養成倫理綱領」で示された内容に従った実際の施設実習を経験した学生とこれらの代替演習のみを経験した学生との相違点や学修効果についての検証が今後の大きな課題として生じられることとなった。

また研究 2 としてチームビルディングを企図した学生間交流に取り組んだが、前述のさまざまな代替演習とどう組み合わせる実施することができるのか、あるいは従来の施設実習指導にどのように入れ込んでいけばよいかについてさらに検討し、効果的なオンライン交流プログラムを開発していくことも望まれる。

## 注

注 1) 本資料は、全国保育士養成協議会東北ブロック研究委員会特別研究プロジェクト「保育実習代替授業教材」として同研究委員会が作成・開発したものである。本教材の使用は、東北ブロック保育士養成校と東北ブロック以外の教材作成協力校のみに限定されている。今回は参考資料としての閲覧および紹介の許可をいただいた。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省子ども家庭局保育課 (2020), 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」 <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000602227.pdf>, 2021 年 9 月 18 日
- 2) 加藤康明 (1986), 「滝乃川学園成立史の研究—初期の学園の性格について—」, 『特殊教育学研究』, 24(3), pp.50-60.
- 3) 智慧の燈火プロジェクト長寿企業 社会福祉法人滝乃川学園, 「学園」の発祥. <https://chienotomoshihi.jp/intro/takinogawagakuen/another-story1/>, 2021 年 8 月 8 日
- 4) 全国保育士養成協議会 (1989), 『保育士養成資料集 2 巻』, pp.1-13.
- 5) 竹之下典祥 (2012), 「第 2 章 2. 利用者主体と職員倫理」『【シリーズ・新しい時代の保育者養成】社会福祉』, あいり出版, pp.32-33.
- 6) 名古屋短期大学保育科実習委員会 (2021), 「COVID-19 感染拡大が実習に及ぼす影響と学内プログラムの実践」, 『名古屋短期大学研究紀要』, 59, pp.99-122.
- 7) 藤原映久・宮下裕一 (2020), 「保育士養成課程における学内での演習・実習の試み—コロナ禍における保育実習 I (施設実習) の代替として—」, 『島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報』, 2, pp.97-104.

- 8) 松居紀久子(2020),「コロナ禍での保育実習(学内実習)の実践報告—障害者の生活支援を取り入れた取り組み—」, 『富山短期大学紀要』, 57, pp.106-116.
- 9) 全国保育士養成協議会保育士養成研究所 (2021), 「新型コロナウイルス感染症への対応に関わる本会員校の第2回実態調査結果(速報)」, 一般社団法人全国保育士養成協議会, <https://www.hoyokyo.or.jp/2ndCOVID-19hykflashresult.pdf>, 2021年9月20日
- 10) 全国保育士養成協議会東北ブロック研究委員会特別研究プロジェクト (2021), 「【保育実習代替授業教材】(施設実習版)について(令和3年2月25日)」, 全国保育士養成協議会東北ブロック.
- 11) 全国保育士養成協議会東北ブロック研究委員会特別研究プロジェクト (2021), 「【保育実習代替授業教材】の利用方法等について(令和3年2月25日)」, 全国保育士養成協議会東北ブロック.
- 12) 内本充統 (2020), 「新型コロナウイルス感染拡大による施設実習の中止と補填について」, 『和顔愛語』, 49, pp.20-30.
- 13) 川俣沙織・山下雅佳実・櫻井裕介・永渕美香子・井上智史 (2021), 「学外実習の代替となる学内実習の概要と展開—ICTを活用した保育現場との協働による学内実習プログラムの構築—」, 『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』, 53, pp.157-165.
- 14) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2020), 「一般社団法人全国保育士養成協議会保育士養成倫理綱領」 <https://hoyokyo.or.jp/CodeofEthics20200620.pdf>, 2021年9月18日
- 15) 大村海太・高玉和子 (2019), 「児童福祉施設等における保育実習が学生に与える影響」, 『駒沢女子短期大学研究紀要』, 52, pp.67-76.
- 16) 白井いづみ・古志めぐみ・青木紀久代・矢野由佳子 (2016), 「保育短大生におけるキャリアレディネスへの関連要因—保育実習経験に着目して—」, 『高等学校と学習支援』, 7, pp.120-127.